

竹内好の文学観の形成

——北京留学を契機として

余 禱 延

はじめに

一九三七年十月から一九三九年十月までの二年間、竹内好は日本の外務省文化事業部の第三種補助金を受けて、留学生として北京に滞在していた。北京留学の二年間の体験と、その延長線上にある帰国後の思考の営為は、竹内の文学観における転換点といえる。例えば、丸山真男は次のように述べている。

好さん本人も(中略)三七年からの二年間の北京生活はブラブラ無為の日を送った、と自己嫌悪の念で回想しているくらいですから……。(中略)

北京生活の混沌のなかに身を置いて、ちょうど阿Q的な中国が鉄火の洗礼を受けて変貌してゆくのとパラレルに、竹内好も自己凝視を通じて昨日までの自分と変わってゆく。そこから引返す途はもうない、という極限のところに帰国直前の好さんは立っていたように見えるんです。(中略)

もちろん、好さんの意識のうえで八・一五の敗戦がやはり個人体験としても大きなエポックになっていることは、「屈辱の事件」(全集、第十三卷所収)の一文だけでも明らかですし、戦後も期待と失望を繰り返している。けれども、もっと奥底の精神的回心ということ

になると、ぼくの推測は北京時代に遡るんです^①。

丸山は、竹内好の北京留学時に「精神的回心」があったと推測している。「精神的回心」という言い方は、竹内の思想が根本的に変化したこと、あるいは個人的思想が新たに形成した可能性がある。丸山は、竹内の留学前後の詳細を記す資料である「北京日記」について、「もうこれからの竹内好論はこの北京日記をぬきにしては意味がないと言いきってもいい。それくらい重要なものです。」^②と言っている。しかし、丸山の発言は単なるインタビューに対する答えであるため、留学前後の竹内に対する具体的な分析がない。

これまでの研究では、竹内好の北京留学に触れた例は多いが、竹内の文学思想の核心を全面的に論じたものは少ない^③。とりわけ、竹内の北京体験を考察すると同時に、「北京日記」をも取り上げながら、竹内の文学精神を解読しようとした先行研究は、岡山麻子の考察のみだと思われる。岡山は次のように述べている。

丸山による、こうした「北京日記」の重要性の指摘にも関わらず、これまでの竹内好研究において、「北京日記」は本格的な研究の対象とされてこなかった。竹内好に関する先行研究の多くは、彼の中国論や日本近代批判、また安保反対運動といった個別の仕事について

の研究であり、それらの多様な仕事を根底において規定する竹内の思想的核心を掴もうとする視点が欠落している。^④

続けて、岡山は、岡本かの子の小説に傾倒していた時期の竹内好を考察しつつ、竹内と北京で出会った女性である峯子の恋愛体験を分析し、さらに、かの子文学と恋愛体験によって文学者竹内が精神の画期を実現できた可能性があると結論づけている。^⑤

しかし、文学と社会、または文学と政治について深く考え続けていた竹内好がこの時期、北京での経験を踏まえ、どのように態度を変化させていったのかという問題が残されている。竹内は一九三四年に東京帝国大学文学部を卒業した。そして、竹内は北京留学中に「文学がきらめられるものかどうか」と書き、一度は文学を断念しようとする苦悩する。結局、北京留学が終わって間もなく、竹内は文学の場に戻った。このような竹内の変化を解説するために、文学と政治の構図の中の彼の文学観を分析することは必要不可欠だと思われる。本論では、「北京日記」と留学前後の文章を検討することで、竹内の特異な体験と留学前後の彼の文学に対する認識を明らかにしたい。

一、留学前の文学観

留学前の竹内好の文学観は、日本文学の私小説に由来する。その点は彼の卒業論文「郁達夫研究」(一九三四年)と留学の直前に改稿された「郁達夫覚書」(一九三七年一月)の中から読み取ることができる。竹内は次のように述べている。

元来彼の文学観は如何なるものであるかといえ、文学は自我の

実現であるということ、従って個性の尊重と、文学は経験以外に出ることは出来ないということ、……(中略)

彼はこの二元性克服のために何れか一方の路を選ばなければならなかった。革命文学に趨くか、時代に反抗しても自己の道を守るかであった。而して彼は後者を選んだのである。^⑦

彼の作品はすべて自己の生活、感情の告白を出でない。新文学中ただ一人の正しい私小説(むしろ日本的な)作家である。彼を動かし、たものは、文学は自我の実現であるという信念、また、文学は経験を超え得ぬという信念である。ルソオ及びスチルネルに流をくむ一種の天才思想をもつ。^⑧

初期の郁達夫の時代に遡ると、中国の社会は革命の時代であった。特に一九二四年から一九二七年まで、中国国民党と中国共産党によって引き起こされた「国民革命」、及び一九二七年の「南昌蜂起」の後、中国共産党が惹起した革命である。文学はそうした政治情勢に従いながら革命文学となり、社会に強く影響された文学としてあった。^⑨ところが、竹内好の考えでは、郁達夫は革命文学の方へ進むかどうかを迷いながらも、時代の潮流に逆らい、旧政治の悪弊を批判せず、「自己の道を守り」、「自我の実現」を重んじ、革命文学と一線を画することを選んだ。竹内の目から見た郁達夫は社会から離れた作家の個人的経験を描写していた。竹内が以上のように自分の郁達夫像を構想したという事実に基づいて、高橋和巳はさらに次のように説明している。

魯迅論以前の竹内好の文学観は、むしろはなはだ古風なものだった。彼の卒業論文である「郁達夫研究」は、いま見るを得ないが(そ

れを改稿したものと思われる「郁達夫覚書」が『中国文学月報』第二十二号に掲載されていて、この破滅型作家への接近の理由が、「文学は経験を超え得ない」と確信する郁達夫の文学の私小説性と、一種悲しげなそのローマンの文体にあったのだからとは容易に推察できる。(中略) 文学理解とは、なによりもまず人間との対面であるとする態度と相関的に、より直接的に人間と対面しうる文学形式として私小説を評価する〈古風〉さをともなったことが解るのである。^⑩

作家として出発した時期の郁達夫の文学は日本文学の私小説からの影響を強く受けていると言われており、竹内好もその特徴を捉えている。竹内がなぜ私小説の特徴を高く評価する文学観を持っていたのかということについては、未だ定説がない。ただし、竹内と同時代の宇野浩二や小林秀雄の見解などを踏まえ、一九三五年前後から第二次大戦中までの私小説をめぐる議論に対する谷沢永一の研究をも参照すれば、竹内が一九三七年の段階で私小説から影響を受けていたのは不思議なことではないと考えられる。

具体的には、宇野は「将来は知らず、少くとも明治末期から今日までの日本の小説(これを純文学といふか?)は『私小説』が主流をなしてゐるやうに思はれる。」と述べており、これを受けて、小林は「『私小説』がわが近代文学の主流であったといふ意見は間違つてはゐないと思ふが、今日重要な問題は、『よく考へてみると不思議な現象である』といふ處だけにある。」と指摘している。

さらに、谷沢は、私小説が文壇の中で看過できない問題となった時期について、次のように述べている。

これらの真摯な調査の過程で明らかになった如く、その発生は大

正末年である私小説という呼称が、しかし、それを使って直接日本近代文学の中核的な問題を俎上にのぼせるためのキメ手として意識されるようになったのは、昭和十年、小林秀雄が「私小説論」を書いた前後の時期以来のことである。^⑪

竹内好が北京留学へ行った一九三〇年代には、私小説が近代文学の主流であった。そして、谷沢の言い方によれば、当時、私小説は直接日本近代文学の中核的な問題を解決する決め手とされていた。竹内はその影響を受け、私小説の特徴を高く評価したのではないだろうか。

私小説は日本の自然主義文学の発展を促した。一九〇〇年代、日本の自然主義文学が現れ、何の雑作もない無技巧写実を提唱し、自分の経験を偽ることなく描くことを主張する。その延長線上で、一九〇七年に発表された田山花袋の「蒲団」、あるいは一九一三年の近松秋江の「疑惑」と白樺派を代表した「文壇交遊録」は日本自然主義文学における私小説の嚆矢とされている。^⑫

竹内好はまず日本の私小説における作家の個人的経験という特徴に基づいて、自分の郁達夫像を作り上げた。私小説の作品はしばしば一人称で描かれ、時には三人称でも書かれるが、作者が直接に経験したことがらを素材として書かれた小説である。主人公が作者その人らしく書かれているので、私小説は作家が自分を主人公として「造形」した作品であると常に理解されてきた。日比嘉高によれば、「造形」は私小説における主人公と作者が同一視されることを意味するわけではないが、作者が自分自身の「心的閥歴」や「自分の感じ」などを「告白性・直接性・暴露性」の手法で描くことを通して、「主人公と作者その人との間には殆んど距離がない」ということを指す。したがって、「事件ではなく心理を描いた事への注目」とされている。即ち作者という人間の心理や感情は作品

の主人公の心理や感情を通して作品の中に直接に表現されている。その特徴は私小説のみならず、明治四十年の後半期から終戦までの日本文学の全体に大きく影響した。それゆえに、私小説も含む、作品に作家自身を投影している、即ち自分の心理を直接に表現する作品の広範囲のグループは、先行研究で「自己表象」の文学と呼ばれている^⑮。

次に竹内好は日本の私小説において、文学と社会が乖離する特徴を踏まえ、自分の郁達夫像を立てた。私小説に由来するその特徴は日本の「文壇」という社会的に孤立した特殊な集団から語らなければならない。その点に関して、伊藤整は次のように述べている。

秋声のような作品が成立したのは、日本の現実社会と融合し交渉し共感することを拒む思考者の狭い一群の中であった。文壇の中においてであった。(中略)その推定がすぐに出来、秋声の過去について、恋愛について、生活の様式について、性質についての予備知識を、同じように社会から背いた一群の特殊人と、その中に加わることを志願する次の代の一群の若者たちは、十分に持っていた。(中略)彼等はその破倫な、無謀な生活を記録して発表した^⑯が、それは社会全体には届かなかつた。彼等は政治を批評せず、社会を訂正しよう^⑰とせず、自分等の方にひげ目を感じて生きていた。

また、小林秀雄も次のように指摘している。

花袋がモオパッサンを発見した時、彼は全く文学の外から、自分の文学活動を否定する様に或は激励する様に強く働きかけて来る時代の思想の力を眺める事が出来なかつた。文学自体に外から生き物の様に働きかける社会化され組織化された思想の力といふ様なもの

は当時の作家等が夢にも考へなかつたものである。(中略)
私小説が所謂心境小説に通ずる所以も其處にある。実生活に関する告白や経験談は、次第に精鍊され「私」の純化に向ふ。私小説論とは当時の文人の純粹小説論だと言つた意味もそこに由来する^⑱。

当時の私小説の作家たちは社会と無縁であつたようだ。彼らは現実社会から独立した文壇という仕組みの中で存在しており、文壇という場でのみ一種の天才的な才能を発揮することができた。彼らの文壇の世界と現実の世界という二つの世界が調和できない場合、私小説の作家は現実の世界に対して絶望的になり、文壇の世界の中のみで文学における純粹な芸術性を求め、自分の作家としてのアイデンティティや価値を探す私小説の作家になつた。彼らは社会の付属品ではないため、社会全体を統合するとともに社会の意思決定を行う政治的統治とも無関係である。以上のような、小林が「文人の純粹小説」と称した日本の私小説における、政治的統治を批判せず、革命文学と乖離する一部の特徴は竹内好の郁達夫像と繋がっている。竹内は日本の私小説の特徴を当てはめて、郁達夫像を考えたことに引き続き、「矛盾論」と「魯迅論」を書き、文学の理解を次のように展開した。

矛盾は、この世界の機構と、そこに躍る人間のカラクリに多くの興味を有つようである。彼の描く人間は、彼によって同情されたり、愛憎の執れをも抱かれたことがない。(中略)

小説が人間を描くものであるならば、彼はすべての作品中に徒に失敗を積重ねた^⑲。

政治と芸術との相剋は、現代中国文学の基本的性格である。轉換

期の文学は、その本来の進歩性の故に、自ら殻をつき破る冒険を敢てしなければならぬ。歴史上では、魏晉や明末がそうであった。一九二五年から三〇年にかけて、所謂大革命の時代に、魯迅自身が彼の描いた阿Qの役割を再演しなければならなかったのは、傍人の如何ともなし難い芸術家の皮肉な運命であろう。しかも、この転身を、彼は極めてあざやかにやってのけた。一九三〇年、自由大同盟を経て成立した左連の椅子には、魯迅その人が坐っていたのである。彼は、その準備のために、創造者と悪態をつき合う暇に、多くのマルクス主義文学理論を翻訳している。だから、この転身は、彼の人並ならぬ聡明さを物語るものであるが、同時に、そこに現代中国文学の脆弱性を窺うように思えてならない。²⁰

竹内好が考えた、「世界の機構」や「カラクリ」といった用語は社会の構造を表すものであり、社会全体を統合する政治的統治に引きずられていることを批判するものである。それに対立する文学は、社会環境を描くために登場人物を操るものではなく、社会と政治から遊離する「文壇」の作家個人の「愛憎」を描くものはずである。政治と文学の芸術性の「相剋」が重要であると彼は認識していたのである。また、竹内は、文学者魯迅が政治的組織である左連に参加したことが「政治と文学の相剋」に反していると考えた。竹内はそれを「弱点」と見なした。文学が政治のスローガンではなく、人間の代弁者であるべきだと考えていたのである。松枝茂夫は竹内の当時の感情を「少なくとも彼が卒業論文に書いた郁達夫に対するような愛着を、彼はまだ魯迅に対しては持っていないかっただろうと思われる。」とまとめている。²¹

二、絶望

竹内好は一九三七年十月、北京に到着した。そして、一九三七年七月七日、北京では、「蘆溝橋事件」が起こった。それは日中間の全面戦争の引き金であった。「蘆溝橋事件」の結果、中国側が敗北し、北京が陥落した。八月には察哈爾で、九月には河北南部で、十月には山西で、十二月には山東でも戦闘があった。そのような戦争状況の下で中国の知識人は大量に北京を離れ、日本人は北京に入った。当時の日本人に知られていた中国の著名な学者で、北京に残っていたのは周作人、徐祖正、傅仲滔と錢稻孫などわずかである。²²そこで竹内は次のような期待を抱いていた。

僕が私かに期待したものは、混乱の中に生れ出る荒々しい生気であつた。思想と思想の相撃つ火花であつた。戦争の伴う急激な文化の相剋、交流——一瞬にして成るであろう破壊から建設へのさまざまな奔流の胸打たれる光景であつた。(中略)

僕は今度の旅行で身にしみて感じたのは、文化の政治と分ち難い一事である。僕は来る途々、たとえていえば路傍の一木一草にも政治を感じた。日本のような機構の複雑化した、それだけ擬制の多いところから、事実上の軍政の地へ来てみると、この印象はまことに歴々としている。軍事と政治と文化とは、あたかも一本の触手の如く動いているのだ。何故もつと基礎的な勉強をしておかなかつたと悔まれる。複雑な現象を処理するのは一の人間の能力であらう。²³

ここで竹内好が「政治」と呼んでいるものは、日本軍による統治とその統治下にある社会を指していると思われるが、戦争が始まった後、竹内が期待していたのは、「思想と思想の相撃つ火花」によって文化と政治

が分離することであろう。つまり、北京に流入した日本人たちが中国の知識人と交流し、衝突し、そして衝突によって日本占領下の日本化された社会、及び続いて発生するかもしれない日本化された政治から遊離する「文壇」の作家の個人的な視線が現れるということではないだろうか。日中衝突による知識人の絶望に由来する作家の視線の出現が文学作品の中に反映されていけば、北京の文学（文化）が日本占領という政治と軍事の現場から離れていくことが可能になるかも知れないと竹内は考えていたと思われる。そのような期待を抱えた竹内の交際の多くは、日本人との付き合いから中国人との付き合いに変わっていった。その点に関して、鶴見俊輔は次のように述べている。

留学したといっても、当時の中国の大学は閉鎖されていた。日本軍による中国人の無差別虐殺のはなしがそれも当事者によってほこらかにつたえられる。こういう状況の下で、日本人とのつきあいは竹内好にとつて重苦しい。²⁴⁾

竹内好は、希望を周作人など中国の知識人に見出そうとした。周作人は竹内好の知人であり、当時、北京の文学の代表者であった。その上、竹内の知る周作人の考えには竹内の期待に近いものが存在していたと考えられる。一九三五年の周作人の立場に関して、松枝茂夫は「先生は始めから孔融であると共に亦た始めから陶淵明であった。叛徒（孔融）と隠士（陶淵明）とは共に先生の中に同居する二要素であった。」²⁵⁾と分析しているからである。松枝は周作人が一九二七年に書いた作品『澤瀉集』を通して、周作人の考えには「隠士」の立場が存在していると指摘している。「隠士」は中国の古代に由来するものである。「隠」は現実の社会と政治など俗世間を離れ、世外の桃源に逃げるといふ行為であろう。「士」

は中国の古代のエリート階層である。「隠士」の代表者は陶淵明である。陶淵明は役人生活の束縛を嫌って、「帰去来辞」を賦し、官職を捨て、隠居した。隠居中に陶淵明は名文「桃花源記」を書き、現実の生活と社会には存在しない桃源という理想郷を描いた。

一九三七年十二月十四日、日本占領下の北京で傀儡政権の中華民国臨時政府が成立した。これは漢奸によって構成された政権であると認識されている。その政治、経済、軍事、思想、文化を考察すると、漢奸たちが日本占領の道義を提唱していることがわかる。²⁶⁾その後、北京では、漢奸による日本化の傾向がますます顕著になっていく。一九三八年二月九日に日本軍の支援を受け、大阪毎日新聞社によって北京で開催された「更生中国文化建設座談会」はその代表的な例である。周作人や銭稻孫もその座談会に参加し、発言した。結局、北京では、日本占領という政治情勢から独立する文学が出てこなかった。日本人と中国人の「思想と思想の相撃つ火花」などは生まれなかったのである。相撃つこととは反対に、現れたのは日中親善や日中提携など、日本と中国、文学と政治の疑似「友好的」な状況であった。北京以外の都市で、茅盾・郁達夫・老舍・胡風・丁玲など十八人の中国文学者は「給周作人的一封公開信」を発表し、周作人の行為を食い止めようとしたが、周作人は受け入れなかった。そして、抗戦陣営の重慶の知識人茅盾や老舍や郁達夫などは「中華全国文芸界抗敵協会」を作り、「更生中国文化建設座談会」に反対した。²⁷⁾

この当時、外務省文化事業部から補助金を受けて北京に留学していた竹内好は学資のため、北京における日本大使館の官僚と接触しなければならなかった。また、竹内は内務省赤羽事務官の顧問となり、内務省の官僚とも付き合い合ったが、「北京日記」によると、竹内は大使館の勝又に対して、内務省の赤羽に対して、「印象悪し」、「愚劣なる官吏」や「好感もてず」など悪い印象を抱くのみであった。²⁸⁾それでも、竹内は我慢し

て年賀などに出向き、彼らと付き合い続けていたが、結局、「終日在宅」と自室に引きこもり、あるいは「不愉快」な気分になった。竹内は自分の不愉快を日本の官僚に手紙で話したが、理解されなかった。²⁸⁾

このように、日本占領下の北京における日本の官僚に不満であった竹内好と、日本の占領に積極的に協力する周作人など対日協力者とはそれぞれ異なった態度を取っていたが、日本人の竹内は対日協力者が中国人として、平然と日本の占領を受け入れているということが理解できなかったのである。一九三八年八月に入ると、胡適は周作人に手紙を送り、日本占領区以外の場所に移住するよう勧めた。周作人は手紙を書き、胡適のアドバイスを拒否し、相変わらず日本軍占領下の北京の対日協力者の陣営に残っていた。²⁹⁾ 対日協力者たちのそのような姿を見て、期待が裏切られた竹内はますます絶望的な心境に陥って、九月に、松枝茂夫に向けて次のように書いた。

『周作人随筆集』ありがとう。その感想を書きます。ほかに書くことはない。三日考えてない。これと雖も書くことがあつて書くのではない。悪劣な心境にあるのはあなたばかりでないが、悪劣な心境にあつてこういう仕事をしていくのは羨ましい。北京に住みついて、近頃は道を歩きながらああいま自分は何も考えていないのだなど気づく瞬間がある。(中略)

つぎに言い訳ばかりになるが新注文の周作人訪問記もまだ書ける状態にない。つまり訪問してないからだ。この注文はほかにも受けてきたがさて弱る。書くことがないと同様訪問しても先生に質問することはまず何もない。諸君にしてもが僕に質問を与えぬではないか。悪劣なる心境をもって何をか言わん。何をかなさん。³⁰⁾

竹内好は苦悶から脱出することが不可能になり、絶望を抱いた。「悪劣なる心境」と、彼が周作人を訪問できないことは関連している。日本側に積極的に協力する当時の周作人(日本化)に対する竹内の不満も窺えるであろう。³¹⁾

日本占領という政治情勢を受け入れる北京の対日協力者たちに直面した竹内好は十月に入り、『国語音韻論』、『英文法』、『新講国語学概論』、『国音常用字彙』など日本語と英語の本を集中して勉強し、それによって、文学を捨てて、語学に従事しようとした。十一月十五日の日記で「さて語学の本を作るとして、文学があきらめられるものかどうか。」³²⁾と書いている。

また、彼は、中国を愛する気持ちを失い、関心を持ってきた中国に係するすべてのものと絶縁しようとしたのである。後に、留学を終えたばかりの竹内は次のように、この点について説明している。

ある時期の僕は真実、支那文学の縁を切ろうと思った。この時期は次に日記で示す時期である。支那、支那料理、支那人、支那文学、何もかも厭になつたと放言したら、そのとき人は笑っていた。それほど思いつめたというのではなく、漠然と愛しきれぬ気がしたのだ。(中略) 愛さぬものを愛する如く取りつくるのが厭だ。³³⁾

とは言え、竹内好は語学の道には歩まなかった。だが、当時の彼は中国の日本人留学生としての自己を失っていた。竹内は日記で次のように述べている。

日記を廃すること十日である。泣きたくなる。每晚酒をのんだ。四回女を買った。松枝の依頼をまだ果してない。原稿も書いてない。

旅行願も出してない。尤君に五十円借りた。それも殆ど使い果した。眼鏡をなくした。読んだのは『オール読物』の新年号だけである。学校もさぼった。(中略)『オール読物』新年号で、すべてくだらぬ中に二、三見るべきものがあった。大下宇陀児と云う男えらくなくなったものなり。岡成志も同じ。世の中でくだらぬは俺だけかもしれぬとも思われた。(中略)いまや我、我を失えり矣。(中略)すべて混沌としていた。

「世の中でくだらぬは俺だけかもしれぬ」の言葉から、竹内好の自己嫌悪が窺える。竹内は日本のエリート青年として、中国に留学していたが、今は、彼は何も勉強できず、作品を書くこともできず、何のために生活しているのかが分からなくなり、生活が乱れ、「混沌」とした毎日を送っていた。竹内は留學生の身分であったが、「学校もさぼって」、墮落していた。竹内は次第に生活費も尽きて、借金を重ねた。最後にたどり着いた「混沌」の心情の意味は、竹内の言葉によると、「いまや我、我を失えり矣」ということである。つまり、元来のエリート知識人であった竹内は、学校を離れ、墮落し、そして、劣等感を抱いた自分が本来の自分であることを認められなかったのである。今の自我を自我として信じるこゝとができなかつた竹内自身は、大きな挫折感を味わって落ち込んだ。

三、恋愛の体験

自己を嫌悪し、学校から遠ざかつた竹内好を絶望から引き戻したのは、「北京日記」の中で峯子と呼ばれる女性である。竹内がなぜ恋愛感情を抱くことになったのかについては、岡山麻子の検討によれば、岡本かの子の小説への竹内の傾倒に由来するということである。竹内は、かの子の

短編小説『老妓抄』、『鶴は病みき』、『河明り』、『雛妓』などを読み、「荒々しい息づかい」³⁷⁾を感じて生命の力をもやしたというように感得した。かの子文学の課題を実生活の中に見いだすきっかけとなったのが峯子との恋愛だと岡山は述べている。³⁸⁾そして、本論は新たな分析を試みながら、岡山が触れなかつた、竹内自身の覚醒を「北京日記」から読み取りたい。峯子の経歴から見て、彼女は悲哀を抱えた女性であろう。彼女の父は道楽して病氣にかかって死を待つのみであり、彼女の夫は気性が荒く、暴力を振るう男である。生活も貧しかったことから、彼女は故郷から東京へ、東京から中国のハルピンへ、ハルピンから北京へと流浪していったのである。³⁹⁾そして、学校にも行かず、「ブラブラ無為の日を送っていた」竹内好と峯子は外国の北京で偶然に出会った。その時の竹内の心境は、日記で次のように述べられている。

隣の table で壬子香（引用者註…峯子）が客と談笑しているのをきく。こうしてきいていると、やはり酒場の女かなと思う。⁴⁰⁾荒れてやや骨太い指、唇に血が引いている。すさんだ過去を思わせる、しみの出来たたるんだ頬の肉。どこと云ってとりたてて美しい顔に、流石に眼だけは澄んでいると思われる。この女の態度や言葉にぐいぐい引られるような魅力ではない。極くあたりまえな感情しか起きず。それが却ってこの女を哀れ深く思わせる。⁴¹⁾

峯子は貧しさと不幸の中で、客と談笑する手並みを培った。その談笑する様子は楽しくて自然に出てきた女性の美しい姿ではなく、貧乏な弱者として、長い間、強者の歡心を買う悲哀を抱えた結果である。そのような貧乏な弱者の女性に直面し、エリート青年の竹内好は自尊、心や優越感を取り戻そうし、「やはり酒場の女かな」というやや軽蔑的で厭な印象

を持った。その後、竹内は貧しい峯子に対して憐憫の感情を抱き、「哀れ深く思わせる」と同情する。

竹内好は日本の最も優秀な大学である東京帝国大学を卒業しており、日本の一流の人材と言ってもいいであろう。そして、当時、竹内は外省文化事業部の補助金を受け、北京に留学していた、日本人のなかでも数少ない国費留学生であった。したがって、知識人の竹内と苦しい生活をしてきた峯子の間には、厳然とした身分の差異が存在した。強者の歡心を買わない竹内は峯子の前で、強い姿勢を示し、少し傲慢ともとれる態度を取っていた。

しかし、前述のように、この時期の竹内好は、自分の真の姿に嫌悪していたのである。表面的には優等生の身分であったが、実際は、学校にも行かず、何をしているか分からない劣等生であった。

当時の日本の外務省文化事業部の「在支第三種補助生」の制度を調べると、「日本の大学若しくは専門学校卒業生又は之と同等以上の学力ある者で、中国の大学、大学院、専門学校若しくは其の他に於て修学研究する者に対し、月額百二十円以内の学資を補給するもの。」^{④②}ということが分かる。さらに大里浩秋の研究によつて、当時の外務省文化事業部の第三種補助金を受けた留学生の多くは満額の月額百二十円を得られることはなかった。^{④③}竹内好と同時代の、外務省文化事業部の第三種補助金を受けた留学生濱一衛の生活に対する周豊一の記述の中で、「官費といつても決してほしいままに使える金ではなかった。豊かな生活を送ることが允されなかったのは勿論のことである。間借や喰代で大変だろうと思つて・・・」^{④④}というように分析されている。留学中、竹内は近代科学図書館や北京大学理学院の日本語講師を担当したが、この時期はすべての仕事を辞めていた。^{④⑤}つまり、竹内は学費を払った後、実際、貧乏な生活を送っていた。そのような竹内は峯子の前で、劣等生で貧困な自己の姿を隠

そうとした。だが、その努力は次のように失敗する。

汝よくこの死闘を現実に行う勇氣ありや。好きかきらいか、はっきり云えと壬子香はせまる。弱虫と云う。昨日は別れるとき、どんとからだを突いて意気地なしと云った。手をさしのべ、幾度か握った。面はゆい気持である。壬子香の顔を直視出来ぬ気の弱さである。(中略) どうして素直な気持になれぬかとせめる。芳子も卑怯と云った。男らしくないと云う意味であろう。思えば久しい自己憎悪である。すがりたいたい気持ではある。すがつてつっぱなされることを怕れる気持が妨げるのだ。お互いに pose を脱(う)つと壬子香は云う。^{④⑥}

峯子に向き合ったことで竹内好は、自分が果たして現実と戦う勇氣があるかどうかという問題を突きつけられた。峯子は、圧倒するような勢いで竹内に迫った。「はつきり云え」と迫った峯子は、弱い自分を見せたくない竹内の演技を見破っていたのである。「弱虫」と呼ばれた竹内は、自分の隠していた弱点と虚勢を相手に見破られたということを理解した。その後、竹内は峯子の前で相対的に優位に立とうと虚勢を張っていたことに思い至り、恥じ入った。なぜなら、竹内の考えでは、人間と人間の関係は、真摯に向き合う誠実なものであらねばならなかったからである。竹内は恥ずかしさのあまり最早、峯子を直視できなくなった。続いて、峯子は、劣等生の姿の竹内を厭うのではなく、「お互いに pose を脱(う)ごう」、即ち仮面を脱(う)ごうというように竹内に幾度も提案した。その後、次のように竹内は、自身のありのままの姿が峯子の愛情のうちに受けとめられたと感じた。

だんだん純粹な気持になっていくと壬子香は云う。以前鼻につい

た技巧が次第に消えてゆくのは、そうした壬子香の気持から生れる変化なのか。おのれの既に恋の盲となり果てたる浅ましきの仕業なのか。この女ほど素直におれの素朴なありのままの姿に価値を見出してくれた女はなかったし、また将来もあろう筈がないように思える。^{①7}

竹内好は、自尊心や優越感を傷つけないようにするため、自己の墮落と貧困の現実を正視できなかった。峯子はそうした彼の弱さの中に価値を見いだし、愛してくれたのだと竹内は感じたのである。竹内は、峯子のそうした素朴な人格に触れたことで、自分のありのままの醜い現実に向き合う勇気を得たのである。

弱さの価値とはエリート^{①8}の優越感を守るために装う強者の価値とは逆に、全ての仮面を脱いだ後の、社会日常生活におけるありのままの真実の人間の価値である。峯子の目に、弱者としての真実の自己をさらした竹内好は、峯子の思いに打たれ、いとしい憶を抱いた。当然、エリート^{①9}の竹内に社会生活における弱さを認めさせることは容易いことではない。北京留学の最後の恋愛体験の過程において、竹内は次のように頻繁に心変りをしていった。

愛情に餓えているのだ。貪婪に愛情を求めながら、その本心を掘りあてずにいたのだ。峯子はそれを見事に発いた。発いただけでこの女は行ってしまった。この女も愛情に渴えて終生彷徨する運命の血を、放蕩者であった父親から受けているのかもしれない。この俺をかくまで狂おしくする女の不思議な魂。かたくなな俺の心を解きほぐし、恋するものの寂しさを沁み込ませていった、この女の不思議な柔かい純情。^{②0}

竹内好の文学観の形成

今にも峯子が入口の扉からこっそり覗きそうな気がしてならない。既に別れて一週間である。国へ帰ったものならば今ごろ現われるわけではないが、こっそり帰って来て今にも姿を現しそうな気がする。夜毎に狂ったのも二、三日で、昨今は夢も見ず熟睡するのは俺の峯子に対する愛情がなお浅いためであろうか。かくてはこの女にあまりに濟まない気がする。淡い交情と云わば云え。はじめて俺の心を關いたこの女に俺は報ゆるものを持たねばならぬ。^{②1}

俺はこの女が素朴に俺の価値を認めたと思ひ、その点でこの女の素朴さに打たれ、いとしい憶を抱いたのだと思う。はじめて俺の心を開いたと、たしかにその時はそう思ひ、今もまたそう信じている。^{②2}

「北京日記」において、竹内好は峯子との生活を「放蕩者」の生活と称している。エリート^{②3}の竹内はそのような社会での生活に対して、時には「本心」と称しつつ、時にはその生活から離れて「淡い交情」と述べた。彼は恋愛中に峯子に対する態度をも頻繁に変えた。北京留学の最後、竹内は「はじめて俺の心が開いた」と断言し、峯子との社会における「放蕩者」の生活を受け取ったのである。

そのように帰国前の竹内好は恋愛体験を通して、北京の対日協力者に見出し得なかった「人間」を、峯子との日常生活から発見した。当時の北京は、日本の軍事占領と中国の漢奸による日本化された政治によって、混乱していた。日本の官僚、中国人の漢奸以外、特権を持っていなかった普通の民衆の社会生活の全体像は良くなかったと言える。竹内と峯子の生活は当時、日本化された北京における普通の人間生活の代表である。そのような人間は「隠士」のエリートたちのように桃源郷や「文壇」に隠居する可能性がないはずであろう。つまり、彼らは生き続けるために、

現実の社会に直面しなければならぬし、苦しい生活を耐え、自分の弱さを認め、社会から逃げず、社会における自分の真実を相手に見せるのみである。

峯子との「生と性」を体験した竹内好が発見した人間は以前、竹内好学んだ日本の私小説作家に由来する人間と異なる。私小説作家が描く主人公は作家個人のアイデンティティを証明する人間である。その人間は社会から乖離する「文壇」の特殊性の特徴を持っている。それに反して、峯子との生活に由来する人間は、社会の中で不遇や辛苦などに直面しなければならぬ普通の社会人の全体像である。つまり、社会における民衆の中で、誰でも生活のために現実と直面しなければならない感情を持っているのである。

他方、峯子との生活に由来する、等身大の生活体験以外に、竹内好は社会批判の視点をも持っているはずであろう。それは竹内の文学思想の全体を検討した加々美光行の研究によって明らかにされた。つまり、竹内は文学者として、『等身大』を超える世界に向かって文学の言葉を吐こうとする⁵¹ということである。文学者の言葉は、社会における民衆の生の苦しみを読者に語ると同時に、現存の社会秩序と政治の管理への批判をも含む。その上に、竹内は文学と社会、文学と政治が関係していることを次第に理解できたと言者は考える。

竹内好の北京留学は一九三九年十月に期限を迎えた。そのために、帰国直前の竹内は夫を持っている峯子と別れなければならない。最後に、竹内はこの恋愛について次のように述べている。

この女は既に俺の弱点を悉く見抜いて見くびっているのかもしれない。お前が俺を好きになったのは、その弱点に於てこそ、つまりその弱点を透して俺の今は俺自身見失ったかと怕れる純粹な本質を

発見したからではなかったのか。⁵²

ここで、竹内好は自分が以前、自身の弱点を隠していたことを明確にしている。「俺の弱点を悉く見抜いて」という言葉は、峯子がエリート青年である竹内の内面にあった墮落と貧困そのものを発見したということを指している。そして、「俺の今は俺自身見失ったかと怕れる純粹な本質」という言葉は、竹内の懸念を表している。峯子と別れ、日本に戻る直前の竹内は、自分がまもなく北京での生活から抜け出して、再び、東京の有為のエリート青年になり、北京における峯子との生活に由来する以上の体験の記憶を失うということを恐れていた。

四、「中国」への復帰

北京留学を終えて東京に戻った竹内好は、再び「中国」について深く考えるようになった。彼は、以前の自分の考え方について次のように回想している。

支那を支那と呼び支那人を支那人と呼ぶことは支那人の感情を害うから、宜しく中国及び中国人と称すべしという論が行われている。

(中略)

多少の支那文字を読み習い、多少の支那人と識った僕らは、支那人がどんなに支那とよばれることを嫌うか、逆に中国とよぶことが彼らをどれほど喜ばすかという、頗る単純な国民心理の洞察に基づいてこれが応用を企てたわけである。⁵³

竹内好の留学前、東アジアでは日本は植民地支配の強国であり、中国

は半植民地の弱国である。その認識の下で、中国人は時代遅れのレッテルを常に張られていた。その一つは「支那⁵⁴」という東アジアにおける劣等生の代名詞である。竹内はそれに抵抗し、北京留学中、「支那人」とは異なる、優等生の「中国人」を発見しようとした。ところが、その試みは挫折し、絶望感を抱いたようだ。一九四〇年に東京に戻っていた竹内は、北京留学当時の絶望的な状況にあった記憶を再構成することを試みた。北京留学中に竹内は苦悶の時、頻繁に人力車に乗りながら、空を見ていた。竹内は次のように述べている。

そういう日常をくりかえす中、僕の車上の空想に、いつか一つの型が生れた。それは型というより、地上の息苦しさから思考を解放するきっかけのようなものであった。それは、この走る機械を目して発する「俺はこの男に何を加え得るであろうか」という自問の形式であった。(中略)

みじめな、いじらしい、それでいて人に怕れを抱かしめる執拗な本能の漲った生きもの。俺はこの男に何を加え得るか。(中略)

彼らの個人の表情は記憶に残らぬ。在るものは全体としての一個の抽象された支那人一般の顔である。⁵⁵

半植民地の北京で、竹内好は中国人の車夫に対して、「俺はこの男に何を加え得るであろうか」と自問した。つまり、車夫のような、自分と距離がある「機械」を目の当たりにし、竹内は無力を感じたのである。留学中、竹内は優等生の「中国人」の顔を最後まで発見できず、「彼らの個人の表情は記憶に残らぬ」と述べていた。それに対して、竹内が北京留学を終える時に発見したのは、「みじめな」「一個の抽象された支那人一般の顔」である。それは当時の峯子と竹内と同じく、「支那」(北京)とい

う日本化社会の中で生活していた車夫に由来する普遍的な中国人の民衆に共通する、世の辛酸をなめる社会人全体像の顔である。続いて、竹内は次のように述べている。

さて僕は、かつて中国と口にも出し筆にもした僕は、いま口に出し筆にすることに気持が落着かない。この変化はいつころ起ったのであるか。二年間北京に暮すようになってから、僕は支那という言葉に忘れていた愛着の念を再び感じ出していた。(中略)僕は理窟で中国をきらったわけではない。僕は自分に支那がふさわしいと直覚したのである。支那こそ僕のものだ。ほかの何ものよりもそれはいま僕の心情にかなう。見栄や虚飾は人を疲らせるばかりではないか。僕には支那が丁度いいのだ。(中略)

過去に支那と称したことによって、たしかに支那を軽蔑したか、いま中国と称することによって、必ずこれを軽蔑せぬか、何人も己の胸に問うことなくして言葉の問題を提出するとするならば、文学の背信これより甚しきはないであろう。(中略)もし支那に支那人が侮蔑を感じるならば、その被侮蔑感を僕は払拭したい。(中略)僕は支那人を愛さなければならぬとは信じない。だが僕は、ある支那人たちを愛する。それは、彼らが支那人であるからでなく、彼らが僕と同じ悲しみを常住身にまよっているからである。⁵⁶

恋愛の体験によって、自分の優越感から解放された竹内好は、車夫のような市井の中国人民衆の世の辛酸をなめる顔を、自分の悲しい北京の生活体験と関連付け、「この変化はいつころ起ったのであろうか。二年間北京に暮すようになってから」と、さらに「彼らが僕と同じ悲しみを常住身にまよっている」などと述べた。当時の峯子も、当時の竹内も、当

時の北京の中国人の一般の民衆全体も、現実の社会生活の苦しみという真実に直面し、真つ暗闇の中で歩いていたのである。竹内は他者中国人の真実の姿を自己の北京における人生と社会生活に投影できたのである。

その後、竹内好は支那という言葉に拘束されていた自分を発見し、自分の言葉の能動性を取り戻そうとした。「支那こそ僕のものだ」、「僕には支那が丁度いいのだ」などの言葉の意味は、恐らく自分が「支那人」と同じく、混乱した社会と政治支配の下での北京で生活していたということであろう。つまり、北京留学時代の竹内も暗い政治管理と混乱の社会から逃げず、「支那人」という全体の中で生活していたのである。竹内は「支那」という言葉を使うことができる。中国人とともに生活していた日本人竹内が背負っているものは支那と軽蔑された現代中国人の社会生活の悲しみであろう。

五、『魯迅』とその後

留学前に日本の私小説に由来する作家の「個人の経験」や、革命文学と距離を置く文人小説を高く評価し、魯迅を批判したのと異なり、北京留学の後、竹内好は再び魯迅の文章を読み、『魯迅』という本を書くなかで、自分の魯迅像を作り上げた。『魯迅』の中で、竹内は、辛亥革命の「成功」を批判した『阿Q正伝』など政治や社会に関する文学に注目し、同時に魯迅が「三・一八」事件など政治からの迫害を引き続き受けていたが旧政治を倒す能力のない歴史上の事実に基づいて、革命・社会・政治と関わる自身の魯迅像を描き出した。つまり、竹内は魯迅の作品を読み、政治や社会や革命の中で苦しく生活していた魯迅像を書くことで、日本の私小説に由来する留学前の文学観を大きく変化させたと考えられ

る。竹内は文学と政治との関係を、次のように再構築した。

政治と文学の関係は、従属関係や、相剋関係ではない。政治に迎合し、あるひは政治を白眼視するものは、文学でない。真の文学とは、政治において自己の影を破却することである。いはば政治と文学の関係は、矛盾的自己同一の関係である。(中略)文学の生れる根元の場合は、常に政治に取巻かれてゐなければならぬ。それは、文学の花を咲かせるための苛烈な自然条件である。ひよわな花は育たぬが、秀勁な花は長い生命を得る。私はそれを、現代支那文学と、魯迅とに見る。⁵⁶⁾

前述のように、留学前の竹内好は、当時の中国を軽蔑した意味の「支那」と言わず、「中国」と呼んでいた。ここで、竹内は「私はそれを、現代支那文学と、魯迅とに見る」というように「支那」と敢えて述べている。つまり、留学後の竹内は、旧中国の政治管理の混乱状態の下で、現代中国文学における、苦悶する現代中国人全体像の社会生活の真実を直視できるようになったということであろう。

このように、竹内好が「支那」を受け入れることができたからこそ、彼の文学観における文学と社会の関係、及び文学と政治の関係も再構築が可能になったのだと筆者は考える。以前、竹内は文学と政治の関係を「相剋」と書き、文学には日本の私小説作家の個人の特質を描くという芸術の役割を重んじていたが、留学後は、「相剋関係ではない」と自分を否定するように考えを改めた。また、「文学の生まれる根本の場は、常に政治に取巻かれてゐなければならぬ」ということから見て、私小説を進んだ文学だと評価する彼の以前の「古風」な文学観も変化したということが窺える。単純な私小説ではなく、文学の発生が政治、及び政治によって

管理された背後の社会から離れてはならないという見解になった。文学は政治や社会生活において、人間の全体像を発見しようとするのである。文学の発生に対する政治の意義も竹内は認めているのである。こうした文学観が定まることにより、竹内の「掙扎」の魯迅像、あるいは、「現代支那文学」像が生まれたのである。

彼は先覚者ではない。彼は一度も、新時代に対して方向を示さなかった。(中略) 魯迅のやり方は、かうである。彼は、退きもしないし、追従もしない。まづ自己を新時代に対決せしめ、「掙扎」によって自己を洗ひ、洗はれた自己を再びその中から引出すのである。この態度は、一個の強靱な生活者の印象を與へる。魯迅ほど強靱な生活者は、恐らく日本では求められぬかもしれぬ。⁵⁵⁾

文学者である「自己を新時代に対決せしめ」、時代から「自己を洗ひ」という「生活者」は、時代の要素を引き離すことができない現実の社会の状況に直面したことを意味する。時代から自己を「引出す」というのは以上の状況の中から、真の強い文学を生み出していくことを指しているのである。「掙扎」という姿は自己が社会でもがいている姿であり、文学者が旧時代と新時代の中で自己を実現しようとするものではなからう。つまり、竹内は「自己」(文学)と「時代」(社会と政治)が繋がっているという姿を文学観として受け入れた。そのことによって、伝統と現代、文学と政治との葛藤に由来する、有機的結合を持った新しい文学が現れると考えることができたと考える。

竹内好は戦後に、北京留学中、理解できなかった周作人をも理解しつつあった。⁵⁶⁾ 彼は一九六五年に「周作人から核実験まで」の文章を書き、周作人の対日協力者の面を批判し続けると同時に、「排日家」の面もある

ということを発見した。⁶⁰⁾ 政治と文学がつながる文学観を持った後だからこそ、竹内は文学者周作人の「排日家」という政治的側面を高く評価したと考えられる。

おわりに

本稿では、北京時代の竹内好の生活が彼の文学に対する理解にどのように影響を与えたのかを考察し、文学に従事し、文学を放棄し、最終的にまた文学へ戻る思考の過程を検討した。竹内の留学前の文学観は日本文学の私小説における一部の特徴に由来し、社会や政治的統治から乖離する「文壇」作家の人間性を重んじる。留学中、竹内の視線では、半植民地状態の北京の中で、日本占領という社会と政治から距離をおく文学は作り出されなかった。私小説の特徴を持っている文学を発見できなかった竹内の心情は、期待から絶望へと変わった。しかし、竹内は個人的な恋愛体験を経て、「文壇」の人間に近づく知識人としての自分の優越感を捨て、社会や政治の下で生活していた、辛酸をなめる社会の人々の人間像全体を発見し、それを愛することができるようになった。留学後の竹内は政治と文学の不即不離の関係を本格的な文学の特徴であると考えた。その苦悩を経た、思想の変化は竹内の成長であると言える。

戦後、竹内好は「社会環境の日常性」が欠いていた日本文学を批判した。⁶¹⁾ そして、彼は自分の人間観について、戦後、岩波映画の撮影隊が制作したドキュメンタリーの映画「夜明けの国」(一九七六年)を批評する中で、次のように述べた。

けれども、極限状況においてしか人間がとらえられないとする人間観には私は反対である。人間は日常性において人間であり、した

がって愛も憎しみも、日常性において最大に發揮される、という人間観に賛成し、その点私と共通するらしいこの映画の制作者たちを支持する。^⑫

竹内好は個別性を持っている「極限状況」の人間観と、自分の社会における日常生活（ここでの日常生活は中国文化大革命の下での民衆の生活）の人間観の区別を明言した。文学は「極限状況」という特別な人間の愛憎を描くのか、それとも、社会や政治の渦中で日常生活を送る人々の人間像全体の感情を描くのか。竹内の考え方は後者であり、その考え方は彼の北京体験に影響されているということが本論で述べた点である。文学観を定めた竹内は戦後、どのように日本自然主義文学や私小説と格闘したのかは、今後の課題として引き続き、検討していきたい。

注

- ① 丸山真男「竹内日記を読む」『丸山真男集』第十二巻、岩波書店、一九九六年（初出「丸山真男氏に聞く聞き手編集部」『ちくま』第百三十八号、一九八二年九月）。
- ② 同前
- ③ たとえば、松本健一『竹内好論』（第三文明社、一九七五年）。木山英雄『周作人「対日協力」の顛末』（岩波書店、二〇〇四年）。孫歌『竹内好という問い』（岩波書店、二〇〇五年）。鶴見俊輔『竹内好——ある方法の伝記』（リポポート、二〇〇五年）。丸川哲史『竹内好——アジアとの出会い』（河出書房新社、二〇一〇年）。黒川みどり・山田智編集『竹内好とその時代・歴史学からの対話』（有志舎、二〇一八年）などである。これらは、歴史学からの考察が多い。王俊文「一九三八年の北京に於ける竹内好と「鬼」の発見——ある「惨」として歎を尽くさず」の集まりを中心として（『東京大学中国語中国文学研究室紀要』第一〇号、二〇〇七年十一月）は竹内の文学思想を論じたが、重要な「北京日記」を分析していな

い。

- ④ 岡山麻子「竹内好の「北京日記」——文学の解体と再生」『社会文化史学』第四十四号、二〇〇三年一月。
- ⑤ 岡山麻子『竹内好の文学精神』論創社、二〇〇二年。
- ⑥ 竹内好「北京日記」一九三八年十一月十五日の項『竹内好全集』第十五巻、筑摩書房、一九八一年。
- ⑦ 竹内好「郁達夫研究」『竹内好全集』第十七巻、筑摩書房、一九八二年。竹内好の卒業論文を提出した日は一九三三年十二月二十八日である。
- ⑧ 竹内好「郁達夫覚書」『中国文学月報』第二十二号、一九三七年一月。
- ⑨ 一九二〇年代の中国の革命と革命文学の発生は一九二一年に遡ることができる。一九二二年四月七日に「中華民国政府組織大綱」が定められた。十日に孫文は選挙を通して非常大總統になった。同年五月五日に孫文は中華民国非常大總統に就任した。同年七月二十三日に中国共産党が成立した。革命の状況に応じて、一九二一年に中国で革命文学が盛り上がった。たとえば、鄭振鐸「文学与革命」・費覺天「從文学革命与社会革命上所見的革命的文学」・翟世英「文学与革命的討論」・周長憲「感情的生活与革命的文学」などである。その後、一九二八年を境にして、前期の革命文学と後期の革命文学に分けられている（王燁「文学研究会与初期革命文学的倡導」『厦門大学学报』二〇〇六年第三期、二〇〇六年五月）。
- ⑩ 高橋和巳「自立の精神——竹内好における魯迅精神」『思想の科学』第四巻第二十九号第三十号、一九六一年五月六月。
- ⑪ たとえば、鄭梅園、黄成湘「自我毀滅的表露——郁達夫的『沈淪』和日本私小説」『科教導刊』二〇一四年第二十七号、二〇一四年九月。李紅艷、宋会芳「郁達夫自叙伝小説風格形成原因探究」『梧州学院学报』二〇一五年五期、二〇一五年十月などである。
- ⑫ 宇野浩二「私小説」私見『文芸首都』第一巻第九号、一九三三年九月。
- ⑬ 小林秀雄「私小説について」『文学界』創刊号、一九三三年九月。
- ⑭ 谷沢永一「私小説論の系譜」『近代日本文学史の構想』晶文社、一九六四年。
- ⑮ 小林秀雄「私小説論」『經濟往来』第十巻第五十八号、一九三五年五月。

八月。平野謙「私小説の二律背反」『平野謙全集』第二卷、新潮社、一九七五年。

①⑥ 日比嘉高『自己表象』の文学史』序章と第二章、翰林書房、二〇〇二年、九頁から百七頁までの内容を筆者がまとめたものである。

①⑦ 伊藤整『小説の方法』河出書房、一九四八年。

①⑧ 小林秀雄「私小説論」(前掲)。

①⑨ 竹内好「茅盾論」『中国文学月報』第十四号、一九三六年六月。

②⑩ 竹内好「魯迅論」『中国文学月報』第二十号、一九三六年十一月。

②⑪ 松枝茂夫「竹内好と魯迅」竹内好訳『魯迅文集第四卷月報』筑摩書房、一九七七年十二月。

②② 竹内好「北京通信(一)」『中国文学月報』第三十三号、一九三七年十二月。

②③ 同前。

②④ 鶴見俊輔『竹内好 ある方法の伝記』岩波書店、二〇一〇年。

②⑤ 松枝茂夫「周作人先生の立場」『支那語学報』創刊号、一九三五年十一月。

②⑥ 王琳「対抗日戦争時期華北偽政權的考察」『延安大学学報』一九九七年一期、一九九七年二月。

②⑦ 麦冬「周作人附逆与『文協』反奸」『文芸報』二〇一六年二月二十九日。

②⑧ 竹内「北京日記」(前掲)一九三七年十二月三十日の項。

②⑨ 同前、一九三八年二月一日の項。

③⑩ 張菊香、張鉄榮編著『周作人年譜——一八八五—一九六七』天津人民出版社、二〇〇〇年。

③⑪ 竹内好「北京通信(三)」『中国文学月報』第四十二号、一九三八年九月。

③⑫ この時期、竹内好は周作人に不満を抱き、訪問できなかった。しかし、当時の『中国文学月報』の計画に従い、周作人の文学に関する批評を書かなければならなかった。ゆえに、竹内好は敢えて、周作人の以前の作品(一九三四年の「論語小記」)における「鬼」について言及した。この「鬼」によって、竹内好が救われたという見方は、王俊文の前述の論文「一九三八年の北京に於ける竹内好と「鬼」の発見——ある「慘」として歎を尽くさず

の集まりを中心として」における考えである。一方、岡山麻子は、前述の『竹内好の文学精神』の本の中で、竹内の思想が変わった時期を後の恋愛体験の時期に設定し、王の見方と異なる見解を提示している。筆者は岡山の指摘を支持する。その理由として、1、王は「鬼」以降の竹内が苦悶して文学をあきらめようとしたこと、そして、恋愛に向き合った事実について全く言及していない。2、王は、竹内好が周作人を訪問せず、『中国文学月報』のため、周作人の当時の作品ではなく、敢えて以前の作品の中に「鬼」を発見したという経緯に触れていない。3、「鬼」(非人間)も竹内好の期待した「人間」とは異なるものである。

③⑬ 竹内「北京日記」(前掲)一九三八年十月十九日の項、一九三八年十月二十日の項、一九三八年十月二十四日の項。

③⑭ 同前、一九三八年十一月十五日の項。

③⑮ 竹内好「二年間——黙することの難ければ」『中国文学月報』第五七号、一九三九年十二月。

③⑯ 竹内「北京日記」(前掲)一九三八年十二月十六日の項。

③⑰ 同前、一九三九年七月二十六日の項。

③⑱ 岡山『竹内好の文学精神』(前掲)。

③⑲ 竹内「北京日記」(前掲)一九三九年八月七日の項。

④⑰ 同前、一九三九年八月五日の項。

④⑱ 同前、一九三九年八月七日の項。

④⑲ 河村一夫「対支文化事業関係史——官制上より見たる」『歴史教育』第十五卷第八号、一九六七年八月。

④⑳ 大里浩秋「在華本邦補給生、第一種から第三種まで」『留学生派遣から見た近代日中関係史』御茶の水書房、二〇〇九年。

④㉑ 周豊一「憶往二三事」『颯風』第十九号、一九八七年三月(引用文の翻訳は、中里見敬「濱一衛の北平留学——外務省文化事業部第三種補給生としての留学の実態」『言語文化論究』第三十五号、二〇一五年十一月を参照)。

④㉒ 岡山麻子「竹内好の文学精神——存在と文学」『年報日本史叢』一九九九年号、一九九九年十二月。

④㉓ 竹内「北京日記」(前掲)一九三九年八月十四日。

- ④7 同前、一九三九年八月二十二日の項。
 ④8 同前、一九三九年九月十日の項。
 ④9 同前、一九三九年九月十四日の項。
 ⑤0 同前、一九三九年十月十二日の項。
 ⑤1 加々美光行『鏡の中の日本と中国——中国学コ・ピヘイビオリズムの視座』日本評論社、二〇〇七年。
 ⑤2 竹内好「北京日記」(前掲)一九三九年十月十二日の項。
 ⑤3 竹内好「支那と中国」『中国文学』第六十四号、一九四〇年七月。
 ⑤4 「支那」には元々、強者の弱者に対する軽蔑の意味は込められていない。後に、特に竹内の一九三〇年代一九四〇年代では、当時の中国人は「支那」と聞き、強者日本対弱者中国の軽蔑が含意されていると述べていた(注⑤3を参照)。
 ⑤5 竹内「支那と中国」(前掲)。
 ⑤6 同前。
 ⑤7 竹内好『魯迅』日本評論社、一九四四年。
 ⑤8 同前。

- ⑤9 戦後の竹内好が「排日家」の周作人をどのように理解したのかということについては、伊藤徳也が論じている。本論は、伊藤が触れていない北京留学中に竹内好が「親日家」の周作人を見ながら苦悩したという事実を考察した。本論は、伊藤の研究と論点が違い、文学と政治が関わるまでの竹内の考え方の変化を示そうとするものである(伊藤徳也「竹内好の周作人論」『周作人研究通信』第五号、二〇〇七年一月)。
 ⑥0 竹内好「周作人から核実験まで」『世界』第二百二十九号、一九六五年一月。
 ⑥1 竹内好「戦争体験」『雑感』『思想の科学』第二十九号、一九六四年八月。
 ⑥2 竹内好「夜明けの国」『世界』第二百六十四号、一九六七年十一月。

付記…本稿は中国留学基金委「国家建設高水平大学公派研究生項目」の助成を受けたものである。

(本学大学院博士後期課程)